

掌らしめてゐるのである。

紛亂せる伊國がフ黨の強力によつて整頓され平和と繁榮の使命を果すべき諸設備によつてフ黨の理想の實現を見る可き日が近いてゐるのであるが、實蹟の効果を見るは程遠き將來に屬するのである。然しながら吾人の一考に價すべきものがフ黨の諸活動中に多々あることは疑を容れざる處である。諸種の主義の長所美點を國家第一主義の下に如何に吸收し如何に實狀に適合せしめるかは斯道の研究者にとつて興味ある問題である。羅馬時代の大夏の陰に新生命を見出し再び強き國家を建設せんとするフ主義に興味を抱くは伊國の玄關を覗く者にとつては當然過ぎる程當然なことである。

新著紹介

○ Deposition of the Sedimentary Rocks

By J. E. Marr. 1929, Cambridge University Press.
3圖75(九著)

新著紹介

著者は曰く地文學は現世の地質學にて、地質學は過去現在の地文學を綜合したものであると。實に地文學はスリーディメンションの學問であるが地質學には之に加ふるに「時」といふものがある。チャレンジャー號などの海底探検によつて水成岩の沈積の状態を始めて知つた吾人はまた水成岩の成層によつて海底の沈積が如何に進行するかを知る。地質學の研究に先づ第一に必要な事は時代の考察である。化石による地質時代の確立は可なり古くから試みられた事であるが進化論の知識の加はるやうになつて多大の進歩をした。著者は以前の著書 *The Principles of Stratigraphical Geology* に述べた化石の榮枯盛衰の理を再び巧に説いてゐる。生物の内對比に有力なるはプランクトンで(シユードプランクトンを含む)此に次ぐはベンソスである。ベンソスはプランクトンよりも分布が局限されるけれども幼蟲がプランクトンであるものもある。生物の分布には障壁の在否も考へにおかねばならない。次に化石による帶化の問題で其有効なる場合と不利なる點を詳しく論じてゐる。

陸上の沈積は横の分布から氷河、ツンドラ、ステップ、溫帶森林、亞熱帶沙漠、熱帶森林の帶に分たれ其各が如何に地表に作用してをるかを論じてゐる。氷河帶に於ける氷縞粘土は注目すべき事實でスエーデン語より英語化された Varve の語が用ひられてゐる。

海の沈積もベルト(帶)に分たれる。即ち belt of variables

must be organic belt である。第二の泥帯の海岸に近い分界線は inner mud line と外の有機帯との界は outer mud line である。海底に陸より運ばれた碎屑は海岸に近く先づ粗にして重きものを沈積しそれより外方に次第に細かいものを沈積する。沈下する海岸では縦に下から粗より細になるが、反對に上昇する海岸では上に粗なるものが位置する。沈積のサイクルの如何なる性質なるかは他の書にあるよりも簡にして要を得て記されており、實例も充分にあげてある。地盤の上昇下降が続いて起れば海岸に近く所謂不整合を生ずる事などは吾人の考へてゐる事でありながら著者の如くに明確に簡単に説く能はぬ處であつた。即ち沈積のサイクル中に於けるエピサイクルの考である。

海岸に近く belt of variables の章に於て注目すべきは此帯は主に continental shelf の上に沈積してをるが海底には流れの働きがあつて winnowing が行はれてをる事の説である。また此帯の沈積が陸棚の外にまで出る事もありまた此際フリッシ型の砂泥互層が生ずるといふのである。此考は私の調査中である掛川統の研究に多大に教示する處がある。

以上は私が讀んで面白かつた部分であるが此書物は我々層序學の學生の一度は必ず讀むべきものであると信ずる。著者はケムブリッジ大學のセザック博物館長即ち地質學教室主任にあたるウッドローザン教授の要職にあり英國學界にて最も信望厚き學者の一人である。すでに定年の六十五に近く

眼病で瑣保己一の故事の如く本書はラストール氏の筆記になり繪はキング氏が助けたといふ事である。例のケムブリッジ大學出版部の發行で、昨年末に發賣されたものだが見懸は立派でないからヘダンド側には喜ばれぬ流の本である。しかし内容は類似の書物を抜いて斷然すばらしいものだ。横山次郎

○淺間山

八木貞助著 四六版一〇二頁 昭和四年十一月

長野市信濃郷土文化普及會發行 非賣品

著者八木上伊那高等女學校長は淺間火山の研究者であつて近來淺間山の諸現象に關する幾多の論文を發表されて居る。

昔て淺間山なる小冊子を編まれたことがあるが、今度淺間山の構造や、活動の様式を初め學問上面白い火山現象を平易にかゝれたものが本書で信濃郷土叢書の第十一編をなして居る通覽する所平易と雅致のある筆で淺間火山を談り盡さうとされてゐるが、之に交ふるに他の火山との比較を隨處にかゝれてゐるので一般の火山現象は凡て理解し得られる。嘗て大學者が自分の理窟から豫言したことの當らなかつたことや、戯れに火口に石を投ずると淺間の神がおこつて、石を投げ上げることから山に登る人達は敬虔であらねばならぬことなどを書き添へられたことは紹介者の大に意を得た所である。(S)

○老船長の航海餘錄

五野經三著

神戸元町三丁目 海文堂出版 定價二圓八十錢

著者は神戸高等商船學校の教授であつて、もとは郵船の船長をつとめた人「喜望峰迂回」「泰山丸」等世界戰爭當時の航

海者の苦心談をはじめ、「安土府情話」「廣東見物」「伯林まで」
いづれもとどりに面白い。柔かい談話の中に海運政策の立
脚點。我が海運と其の海員など憂國の文字がまじる後篇には
「羅府及ホノル」、「南洋新領土巡り」、「桑港」「サン、ティエイ
ゴ」「ボナバ」「室蘭」「小笠原」といつた太平洋岸航海の物語り
がある、予はその面白さに酔はされた一人として之を讀者に
推奨する。眞に近頃の優秀な紀行文集である。最後に四六版
七百頁、挿畫の多いこの本が體裁よく、この程度に我神戸か
ら出版されたことを、特記して海文堂の努力を紹介しておき
たい。(藤田)

○概観世界地誌上卷

香川幹一著 古今書院發行

定價三圓五十錢

さきに地名の起源と地形學原論の著を出された精力家香川
氏は今回古今書院から本書を出された、手頃な邦文の世界地
誌が欲しい、中學校の參考書にといふやうな世の中の要求に
應じた好個の著述である。菊版四六八頁、本書には亞細亞と
歐羅巴とを収めてある、本書の特色はその地形的説明が極め
て多いといふ點にある、多くの參考書の粹をあつめて地形を
のべ氣候を論じて自然的景觀の印象を深からしめんとするの
用意が試みられてゐる、さうした結果多くのカッパが入つて
ゐるが、それが皆著者のフリーハンドでしきうつしされたも
のであるから稚拙の缺點があるけれども面白い點がないでは
ない。評者のごとき苦心のないものは、とてもこゝまで黒人

に近くはかけない。勿論人文地理に關する方面に於ても、多
くの交通圖や産業圖を入れて説明されてゐるが、その分量は
地形的記述に比して甚だ少い。これは歐亞のごとき地誌的記
述の多かるべき大州をわづか四百六十頁内外で、切り上げた
結果であらう。従つて中學校の地誌の參考としてはやゝ物
足らぬ點がありはしないであらうか、地形又は自然景と人文
との交渉についても、今一段くだけた説明がほしいと思はれ
るしかし何はとまれ近頃のもつまつた概観世界誌であること
は間違がない。(藤田)

○アラスカに原始藝術を探る

宮武良夫著 萬里閣

書房 定價三圓五十錢

昭和四年十二月十五日發行四六版二百六十頁の美はしい裝
禰本である、巻頭にはコロタイプ七十四圖、アラスカ土人の
トーテムの奇怪な彫刻や、繪畫器具類いづれも珍らしいもの
が多い。猶本文は誠に面白い土俗學的の探検記であり美文で
ある予は本書によつてアラスカ極北土人の可憐な生活振を目
に見るやうに教えられたのみでなく、原始藝術の偉大さを知
ることが出来たことを、本書の著者に感謝する。(F)

○日本農民史

河西省吾編 東京古今書院發行 定價三

圓二十錢

著者は美術史の専門家であるといふことであるが、篤學の
君子である、我國農民生活の歴史的過程を纏めて書かうと志

されて、瀧川政次郎、本庄榮治郎、瀧本誠一、石坂橋樹、竹越三叉、小野武夫、黒正巖氏等主として經濟歴史家の著者から我國の農民生活に關した歴史及其過程を輯覽せられたといふのが本書の自序である。目次は上代、中代、近代の三章にわかれ上古に於ては大化以前、大化大寶の田制、班田等をのべて標準戸の經濟をのべ上代農民生活、社會生活の實情をしるし、中世に於ては、社會階級や、土地税法や、土一揆をのべ、近代に於ては徳川時代の農村、耕地、税法、人口、小作、飢饉、米問題百姓一揆等に及ぶ。著者は先進の業績によつて編したまでだといつてゐられるが、それにしてもこゝまで簡潔にまとめ上げるには骨の折れたことであつたであらう但し大化以前の田制や班田の説明に於てはまだ不十分と思はれる節があり、上代の米の收穫高から見たと一升の實積などについては評者にこれと違つた意見がある、やがて莊園から華かれる封建制度への移り變りについても、説明は十分でない猶又中世の社會生活に就て座の研究に筆が及んでゐない恨があり、城下町の發達なども十分に論じられてはゐない。しかし徳川時代になつてからの記事にはいろいろ教えられる所が多い、何れにしても菊版四百四十五頁の冊子であるのに問題は廣況である、説明の足らぬのも致方がないと考へる。

評者はこれを以て本書の缺點であるとはしない、寧ろかうした方面に注意を向けられた著者の努力を多とし人文地理學を研究する人に一讀をすゝめる。蓋し日本の人文地理を論ず

る人は、一通り我農民の歴史過程を知らねばならぬと考へるからである、最後に近頃古今書院から出た本の中で、最も面白く讀まれる本の一つであることを述べておきたい。(藤田)

雜報

○黒部峡谷の幽勝(口繪解説) 口繪第一圖は、東鍾釣山と其南麓に於て清流に臨める新鍾釣(一名錦繡)温泉場で、東鍾釣山は鐘狀を爲し、積翠滴るが如き美しい山で、大部分白色糖狀の石灰岩から成り、温泉場附近から晩秋紅葉の美觀は眞に錦繡の名に背かない。第二圖は黒龍川に架せる日本水力電氣株式會社の跡曳水路橋で、近く觀ゆるは同社専用軌道の鐵橋である、水路橋は、河面上二三〇尺、徑間約一三四尺、鐵筋混凝土拱橋で、水路を流し來りたる過剰水を放流するのであるが、周圍の絶景に更に小ナイアガラの壯美を加へたもので鐵橋上を電車で通過する時、誰も其美觀を嘆賞せぬものは無い。

○平安北道寧邊郡の大鍾乳洞蝸龍窟 「朝鮮」二月

號所載森爲三氏の記事によると此大鍾乳洞の狀況は次の如くである。窟は寧邊郡龍山面雲鶴站到在り、球場里の南東三十餘町の龍門山の南麓海拔百十米に洞口がある。洞口は高さ一米半幅三米半の橢圓形をなしてゐる。地質は頁岩を介在する寒武奥陶紀の石灰岩である。本洞には支洞が多いが幹洞の全